岡井隆・塚本邦雄・中井英夫

現代短歌大系 12

現代評論集

書肆

現代短歌大系　第十二巻　（全十二巻）

一九七三年九月三十日　第一版第一刷発行

編者　大岡信
　　塚本邦雄
　　中井英夫
©一九七三年
発行者　竹村一

発行所　株式会社　三一書房
東京都千代田区神田駿河台二の九
電話〇三（二九一）三一三一番
振替東京　八四一六〇番

印刷所　第一印刷株式会社
製本所　株式会社鈴木製本所

0392-739812-2726

現代短歌大系
第12巻　目次

写生論発展のために――杉浦明平 007
歌の条件――小田切秀雄 013
短歌への訣別――臼井吉見 021
短歌の運命――桑原武夫 029
新しき短歌の規定――近藤芳美 043
孤独派宣言――宮柊二 047

歌よみに与へたき書――福田恆存 055
短歌におけるヒューマニズム――木俣修 065
女流の歌を閉塞したもの――折口信夫 075
短歌創作の理論――高安国世 083
純粋短歌論――佐藤佐太郎 091
敗北の抒情――菱川善夫 107
異質への情熱――上田三四二 125
療養者の歌と私小説――伊藤整 141
近代主義批判――武川忠一 155
零の遺産――塚本邦雄 167
短歌改革案ノート――岡井隆 179

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ぼくらの戦争体験――岸上大作 197
政治的不安と短歌――清原日出夫 205
思想と表現の関連性――岩田正 211
「私」とは誰か？――寺山修司 223
近代と現代とのあいだ――篠弘 239
「集団の詩」としての短歌――島田修二 253
写実派の〝戦後責任〟――梅田靖夫 265
ノンポリティカル・ペーソス――村木道彦 281
群れとしての前衛歌人――吉田弥寿夫 295
人間の声――佐佐木幸綱 311
解　説――上田三四二 341

編集協力　齋藤　愼爾
篠　　弘
正津　勉
富士田元彦

装幀　澁川　育由

現代評論集

写生論発展のために——杉浦明平

戦争に一敗して今やわれわれは今まで夢にも見なかった新しい生活へ踏出そうとしている。その新しい生活がよいものであるか悪いものであるかは、一にわれわれの努力如何にかかっているといえよう。文学も亦それに伴って未曽有の大転換を余儀なくされるであろうが、それにはそれ相応の苦悩が附添うことをその新文学の建設に参加するわれわれはまず何よりも深く心肝に銘記しておかねばならぬ。蓋し現在のところでは、事態は食糧問題以上に深刻且絶望的であって、人々のいうスエーデンのような文化国家に成るまでには、よし可能としても、五十年か百年を要するにちがいないのであって、その頃にも依然賀川豊彦氏のような人がいて文化国家などを理想としているかどうか誰が知るものか。理想は遠大なるに如かないが、われわれにはもっと目の前のことを見る方がいい。

短歌に対しても恐らく今まで我々の予想しなかったような問題が数多く提起されるにちがいない。定型律の問題、口語短歌の問題も再び取上げられることは必至であるが、それらの処理に当っては単に技術上乃至形式上の論争に終ることなく、恐らくもっと深刻で或は短歌存続の根柢に関するところまで進展するかもしれない。嘗てのプロレタリア歌人たちは浅薄なる公式の口真似に終始したが、今度はそれがもっと切実に追及されることを予想すべきである。

こうした近き将来における諸問題を解決する一つの鍵は、短歌の歴史であり、特に今次大戦中に行われた短歌制作の検討に存することはいうまでもない。何となれば、戦争は日本の政治経済文化あらゆる部面の特質を極度に拡大させて見せたように、短歌の機能をその極限にまで発達させた、というより酷使したらしいからである。

支那事変を含めて戦争の間文学は極度の貧困を告げていた。二三の皇国文学者がほしいままな気

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

焔をあげ、ナチスと神代との捏ね合せを以て我世の春を謳ったところで文学には一文の寄与にもならなかった。昨日のカフェー小説家が海戦従軍記をつくれば、フランス知性の代弁者だった評論家が生産文学を云々するといった具合で、文壇の時世と権力に対する阿諛迎合は到らざるところなしと言うべきであった。それは文学者たちの浅ましい本質を暴露したものであって、われわれは今後ともそういう連中の「民主主義」文学を笑殺する用意がなければならないが、ともかくそういう浅薄な態度から作られたおべっか作品が新聞記者の雑文ほどの価値もなく今までに鼻紙となって消去ったのは当然の成行である。とはいえあれだけ長期間に亘り激烈、深刻に国民生活を震憾せしめた戦争にも拘らずその極く初期における「麦と兵隊」其他を除いては全く一つの戦争文学も生みえなかったことは必ずしも言論思想の抑圧のみに由来するものではありえない。その最も大きな原因の一つは、該期間中活動した文学者が必しも保田与重郎や田中忠夫のごとき成上りの御用商人だったわけでなくとも、少くともいわゆる鎌倉文士のごとく一般国民生活から全く遊離しており、しかもそれに些かの興味をもたない文壇住まいの職業小説家乃至批評家だったことに存している。酒と女の詩人大木篤夫の推薦された戦争詩集よりも露営の夢やその他のデカダンスを深く包んだ流行歌の方がずっと国民のセンスに直接ふれるだけのものを持っており、且つ芸術的にもすぐれていると言えるほどだ。ともかくそのように文学は戦場においても銃後においても国民のためには一つの思想、一つの感情、一つの生活すら映さずに終ってしまったものである。増産計画や軍事的諸計画と同じく懸声だけで何一つなしえなかった点でそれらの文学は正しい社会の鏡であるとほめていいかもしれぬ。

だがしかし文学の諸ジャンルの中で短歌だけは例外をなしていたということができる。短歌は戦

争中国民の生活と感情とを比較的正しく表白した唯一のものであった。といっても、私は「いつのをたけび」の好きな神憑り派を指すのではないし、また国内にあって新聞記事を三十一字のポスター用語に飜訳するのに専心していた歌人を指すのでもない。私は支那事変歌集や月々に戦場から送られた無名戦士にして無名歌人たちの歌を挙げるのである。すでに戦争中においてもしばしば言われていたように、これらの歌は今までの戦争には現れなかったところの特異な国民の声であって、新聞や雑誌が徒らに宣伝用文章で飾られているときもわれわれはこれらの歌の集団においてだけいろいろな形の下に顕在し或は潜在する兵士の感情乃至思想を直接に感じえたのであった。戦場から銃後に送られたものは手紙ですら厳重なる検閲の下にそういう兵等の真情の流露を遮断されて一冊の戦歿学生の手紙をも編むに耐えないのに反して、短歌のみは言葉の中に歪められぬ思想感情を多分に含んだままわれわれの手許に届いた。恐らく渡辺直己の歌が文章として発表されたら直ちに発禁は免れぬ運命であったろう。今われわれは戦争歌集を推薦すべき時期とは思わないが、しかし後世われわれのいたましく惨めな今度の戦争における国民の、特に兵士たちの感情を知りたいものは、あの嘘八百から成る一切の新聞雑誌従軍記等を破り棄てて渡辺直己や上稲吉や生井武司や安良岡康作等々の無名なる兵たちの体験と結びついたささやかな抒情詩に耳を傾けるべきであろうと思う。

何となれば彼らはその抒情の過程においていろいろなことを語っている。なるほどその中には戦争否定又は反対の文字は明瞭には記されてないかもしれぬ。そして防人のように唯々としてお上の命令に従って戦場へ出て征っただけかもしれない。しかし彼らが国内におけるデマゴグたちの如く、偏狭に神州不滅を吠えまわったりしていないことだけでも信用してよい。更に重要なことには、あれだけの細密な検閲の関所をくぐっているにも拘らず、それらの中には国内の疲労した民衆のつぶ

やきと和するように、国民、兵だけが味いえた悲しみ、「皇軍」に対する無意識的なる批判の眼、戦争に対する隠され変形されたる憎悪等がその他意なきように見える文字の下に見え隠れしないでもないことである。

それでは何が短歌をしてかく真の国民の文学たらしめたか。それは一口で言うことができる。それはリアリズムの勝利である、と。アララギによって多年主唱せられた写実主義のみがそういう結果を挙げたのである。かつてハイカラを誇った尖端歌人たちがまるがまるで背広を国民服に着替えるように悉く万葉調に帰依してその軽薄にして舌端だけの愛国主義を「にくにくし夷ら」だの何だのと志士気取りで唸っている間に、リアリズムの実行者は痛烈なる戦争における自己の生活感情乃至思想をとらえて、一つの抒情詩の形に具象化し以てその微かな抒情の文字の下に蔽はれた無意識的若しくは半無意識的なるイロニイによってわれわれを共感させ、かくて今度の戦争の何であるかをしばしばわれわれに予感せしめた。またいわゆる愛国の歌なるものが明治三十七八年時代の埒を超えないのんきなる擬古主義の壮士芝居に終始したのに対して、リアリストたちはその直面する巨大なる現実を処理するためには、そういう言語の綾を楽しむよりむしろ短歌形態の破壊と見えるまでに短歌の機能を極限にまで使用するよりほかはなかった。ここにおいてか五七五七七、三十一文字はおよそ従来考えていたより遙かに広く深く展けたのである。同時に字余り、口語挿入、或は間投詞の使用などの技術的問題も一挙に現実がこれを一応解決してしまったごとくである。この技術的な部面はともかく先述したごとく、その内容において戦時政府が命令した感情生活の軌道からの離脱という点、これはアララギとして予期せざる効果、しかしリアリズムそのものとして極めて論理的

な展開であった。

今や敗戦によって一切は更新せられなければならない時であるが、それは上述したように戦争中の深刻無比な諸経験を目の底に彫りつけておいた上での更新でなくてはならない。従って文学一般にもアララギにも諸他の問題はなお存するのであるけれど、ここにおいてはわれわれの持つリアリズムの正しさが戦争において証明せられたことを銘記しておくべきであろう。アララギの写生は幾多の先輩の伝統を引くものであると同時に、それは常に各段階において理論的実践的に発展深化されて来たのであるが、今次の戦争においては国民的実践によって激しい展開を遂げた。いわばこの深刻なる戦争の洗礼を経たのである。われわれは、単にアララギという雑誌の永続ということではなく広く文学の将来のためにも、あれだけの国民的犠牲によって得られた乏しい財宝の一つとしてこの鉄火の試練を経て鍛えられたるリアリズムを決して十年前に後退させることなく更に深化発展させる義務を負うているものであることを感じる。

――『アララギ』昭和二十一年一月号――

歌の条件——小田切秀雄

——吾心日日憤怒踰矩　斎藤茂吉——

一

折角自由になったのだから、ひとつ思ひっきり自由に振舞って、芸術らしい芸術を創らうではないか。いままで、一切の芸術らしい芸術は極度の抑圧を受けて来た。本来芸術は習俗と凡庸と欺瞞と陋劣とに屈しない人間精神の輝きの一つであるために、うしろ暗い侵略的抑圧権力にとっては、芸術が芸術であること自体恐怖の種とならざるを得なかった。

今そのうしろ暗い権力は傷手を負ひ、表面上はともかくへこたれてゐる。そして吾々は芸術を創ることができる。吾々は吾々のやり方で——芸術を創ることによって、この権力にとどめを刺さう。その残党をして再び起つ能はざらしめよう。芸術家にとって為すべきことはこれ以上にはない。そして芸術家が芸術を創り得るといふこと、これ以上に素晴らしいことはないのだ。自由といふものの文学的な意味は第一ここにある。

だが、芸術への道は容易な道ではない。芸術家が芸術を創るといふことは何等自明のことではない。自身の一生を賭しての、苦悩と歓喜と逸脱と前進との無限の錯雑したいとなみの中にはじめてそれは生れることができる。戦時中、侵略権力の掲げた合言葉を三十一文字に翻訳したり、時局向きに自身の感情を綾づけて事足れりとした状態はもうどこにも存続する余地はない。それは本来芸術などといふものと全く無縁な事だったのだ。丁度侵略権力の抑圧下にさして不自由をも感じずに創作をつづけることの出来た歌人の一切が、芸術の本質にかんがみて本来の芸術家とは全く無縁な、例へば芸人か何かに過ぎなかったのと全く同様に。芸術家は、裸身で自分の胸と頭と手とで脂汗を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com